

2017年度

神戸国際高等学校入学試験

# 国語

(2017年2月10日実施、試験時間50分、100点満点)

(注意)

1. 解答用紙には必ず受験番号を記入してください。
2. 全ての問題に解答してください。
3. 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
4. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は各自持ち帰ってください。

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点や記号（「」など）も字数として数えます。（設問などの都合上、原文を一部改めたところがあります。）

花の木公園にはうさぎが棲んでいる。克久がうさぎを見つけたのは、小学校の卒業式が終わって間もなくだった。寒いどんより曇った午後だ。うさぎはまだ茶色い草の中で丸い目をして動かなかった。静かに、ほんとうに静かに草の中で背を丸めていた。

小学校を卒業した少年が、中学校の入学式にのぞむまで、たった二週間である。① その二週間がどのくらい奇妙な時間であるか、想像がつくだろうか？ 時間のちよつとした（注1）エアポケットがそこにはある。

あれほど大人びていた六年生が、かわいい新入生に化けてしまう。まるで時が逆流しているようだ。逆流しているけれど、ちゃんと前へ進んでいる。a 渦を巻きながら。

こぶしの花が咲き終わろうとしていた。桜は蕾を用意しながら寒い風に震えた。時の渦巻きはその間に声変わりが始まる前の少年にいたずらをする。

克久は小学校の卒業式に出席するために、お父さんからネクタイの結び方を教えてもらった。

「これから毎日、ネクタイは自分で締めなきゃいけないんだ」  
お父さんは満足そうに言った。

克久が入学する市立花の木中学の制服はネクタイにブレザーだった。なのに、靴は白い運動靴と決められていた。洋服屋で制服の採寸をした。

「一寸、大きめに」

これがお母さんと洋服屋の合言葉だ。一寸どころじゃやない。めっちゃめっちゃ大きめだ。鏡の中にいるのは、てんで子どもの克久だ。試着室から出ると、何がおかしいんだか、さっぱり解らないが、お母さんはけたけた笑った。Tシャツの上に着を着たから余計に間が抜けた。花の木公園でうさぎをみつけたのはそんな頃だった。

花の木公園にうさぎが棲んでいるなんて、信じられない。周りは団地とマンションばかりなんだから。克久が足を止めた先で、うさぎは背中を丸めていた。息をこらして、耳を澄ましている。

ほんとうにうさぎなのか？ 克久も息をひそめた。生きたうさぎ

だ。静かに動いている背中が温かそうだ。触りたい。触りたいけれど手を伸ばしたとたんに、絶対、うさぎは駆け出すに違いない。消えてしまったら最後だ。

また同級生に「ウソツキ」と呼ばれるに違いない。いなくなったうさぎが、「いた」ということをどうやって証明したらいいのだろう。克久は草の中で息をするうさぎをじっと見ていた。うさぎと一緒に息をしているような感じがした。ゆっくりと注意深く息をした。うさぎと一緒に息をしていると、克久を意地悪くなじった同級生の顔がぼんやりとかすんでくる。ぼやけた顔に、

「言いたければ、言えばいいさ」

という克久自身の声がかぶさっていく。なんだか気が落ち着くのはどうしてだろう。② 克久はしわだらけになった自分の気持ち、だんだん、のびのびするのを感じた。穏やかに幸福だった。

しかし、そういう心持ちはうさぎと一緒に消えてしまいうさぎ。その日、克久が花の木公園で、うさぎをどのくらいじっと見ていたかと言うと、きつと三十分くらいだ。もっと長かったかもしれない。曇っていた空に薄日が射してきて、うさぎの背中もぬくぬくと春の陽の光に暖かかった。

「君、吹奏楽部に入らないか？」

「エ、スイソウガク!？」

中学校の入学式から二日が過ぎた。

みんなが紺色の制服を着て、かしこまっている教室はなんだかイゴイチが悪い。小学校の教室より暗い感じがした。だから、登校する時も、下足箱の前でのろのろしてしまう。

「ドンクサイ」とか言われたかもしれない。ドキツとした。

「あの、ブラバンです。ブラバンなんです」

三人の上級生が克久を取り囲む。人相の悪い三人組だ。やたら背の高いのが一人。ひよろりと伸びたところに四角い顔が乗っていた。捕物帳に出て来る道具、(注2) 刺股みたいに、なんだかいじめられた。もう一人は冷たそう。冷徹の(注3) 権化。悪人面は悪人面でも、経済事犯か横領か、知能犯の類だった。③ 克久が苦手だ

「メロデー・ハーモニー・ロングトーン」

「ハア」

と、知能犯がばかにしたように。c 甲高い声を出した。悪人面でも、

ばかにされたほうは、山賊めいていた。  
刺股、知能犯、山賊の悪党三人組は、

「男がいないんだ。男がほしい」

克久を取り囲んで、わけの分からないことを言っていた。ウワバキを片手にしたまま、返事のしようがなくて、克久はきよんとしていた。ユ・ユ・コワイ。そんな感じもした。

部活は全員加入。中学の新入生説明会ではそう言われたけれども、克久の頭に部活のことはひとつもなかった。と言うより、考えたくなかった。

学校にいる時間はなるべく短くしたい。それが克久の方針だった。何も考えないこと。何も感じないこと。それが小学校でいじめられていた克久が身につけた知恵だった。

お母さんに自分からいじめられていると言ったことはない。なくられたり、蹴られたりなら言えたかもしれない。ただ、お母さんが、百合子と言うのだけれど、克久を聞いたことはある。彼が早い時間に家に帰って、夕方、再放送のテレビを見ていた時だ。「なんか、イヤなことでもあったの」「ない」

その時、克久はテレビの画面から目を離さずに答えた。持ち物をとられたり、道具を壊されたりしたら、お母さんはもう一寸、彼に詰めよったかもしれない。いつもは「こつちを向いて答えなさい」と言う百合子は、「そう」

④と短く言ったきり、あとは何も言わなかった。

「こつちを向いて答えなさい」と言われなかったことに克久はAすかしをくつたような、でも、ほっとしたような気持ちになった。夕食の時も百合子は何も言わなかった。

シカト、つまり無視されたりするのは、言いくいところがある。言うとう自分が汚れるような感じがする。「何かあっても（注4）毅然としていればいいのよ」と百合子が言ったのはいつ頃だったか。もう冬が来る頃だったかもしれない。

お母さんの言う毅然とした態度と、克久が自分で見出した態度はどこが違うのだろう。何も考えない。何も感じない。そうすれば大丈夫。克久は心を灰色に塗り固めるのが上手になった。もし、その手際を人にみせることができたなら、きつと感心してもらえらる

う。プロの左官屋だって、そんなに鮮やかに塗り固めてしまうことはできない。

困ることがひとつだけある。心を灰色に塗り固めるのが上手になると、同時に、何もかもを忘れてしまう。それはそれで楽でいいのだが、年中、忘れものにあわてふためくはめになる。

⑤過去が塗り固められるから、未来への時間も広がっていかなくなる。中学校の新入生説明会なんて、息をつめているだけの時間にしかならない。もちろん、どんな部活に入るかなんて考えてもみなかった。

そこに人相の悪い三人組だ。

「男がほしいんだ」

山賊が言えば、すかさず刺股が、

「そうそう、オトコがほしいのよ」と、こちらはなにやら気色悪い声音までつけて、くねくねした。知能犯がBをひそめた。おふざけには乗らないでいると、すかさず刺股が山賊に蹴りを入れる振りをした。

克久は右手にウワバキを持ったまま、ぽかんとしている。生徒はどんだん登校して来た。

三人組がふざけだすと、もうプラスチックバンドへのカンユウだか何だか、さっぱり解らなくなってしまう。ただ楽し気に、くつついたり、離れたたり、わけのわからないことを口走ったりしているだけだ。こうなると克久の返事などどうでもいいらしい。克久は急に自分の心を灰色に塗り固めはじめた。意思でそうしたのではなくて、自動的にスイッチが入ったみたいだ。

「放課後、音楽室で練習しているから見に来てくださあい」

くださあい、と語尾をのぼした音が、灰色に塗り固められた心の前でするりと滑り落ちた。耳を澄ませば、下足箱のある出入口とは別棟の音楽室で朝練習をしている部員たちの楽器の音が聞こえてくるはずだった。⑥克久の耳にそれが聞こえないのは当然だ。

（中沢けい「楽隊のうさぎ」より一部改編）

（注）1 エアポケットII飛行中に飛行機が下降気流などの原因で急激に下降する場所。ここでは、日常生活から逸脱して

しまうような感覚を表している。

2 刺股<sup>ニ</sup>江戸時代、罪人を捕らえるのに用いた三つの道具の一つ。木製の長柄<sup>ながえ</sup>の先端に鋭<sup>すど</sup>い月形の金具をつけた武器。

3 権化<sup>ニ</sup>性質や特質が、具体的な姿をとって現れたかのよう<sup>ニ</sup>に思える人やもの。

4 毅然<sup>ニ</sup>意志が強く、物事に動ぜずしっかりしているさま。

問一 — a f の漢字はその読みをひらがなで答え、カタカナは漢字に直して答えなさい。

問二 — ①に「その二週間がどのくらい奇妙な時間であるか、想像がつくだろうか?」とありますが、どのような点で「奇妙」のですか。最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 春休みになると進級するので、次の学年にむけての予習が必要なのに、この二週間はその必要がない点。

イ 進級したはずなのに、小学校に入学したところと同じようなことが繰り返されている点。

ウ これまで、子供扱いされていたのに、急に大人のように扱われはじめる点。

エ 小学生でもなく、中学生でもなく、なんとなく、世の中で自分が消えたように思える点。

オ 学校にもいかずに、何もすることなく、まるで、時がとまっているように感じる点。

問三 — ②に「克久はしわだらけになった自分の気持ち、だんだん、のびのびするのを感じた。」とありますが、克久の気持ちをしわだらけにさせる要因として考えられる一文を、二十三字で抜き出して答えなさい。

問四 — ③に「克久が苦手だといちばん感じるのは、知能犯めいた人相だ。」とありますが、どうしてそう感じたのですか。本文中の言葉を使い、十五字以内で答えなさい。

問五 — ④で「と短く言ったきり、あとは何も言わなかった。」とありますが、「何も言わなかった」母の心情を、その後の母の言葉などから考えて説明したものと最も適切なものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア いつも、何をいつても真剣に返事をしない息子にさすがに愛想<sup>あいき</sup>をつかしていた。

イ できれば聞いただけだしいのだが、夕食の準備に追われて、余裕がなかった。

ウ 息子の様子から、何があったかを感じ取り、ここはそっとしておこうと思った。

エ 学校から早く帰るのは気にはなったが、何事もなく無事に帰ってきたので、安心していった。

オ いつも「毅然<sup>じきん</sup>としていればいい」といつている手前、息子の答えを信用しようと思った。

問六 文中の A ・ B に入る言葉として最も適切なものをそれぞれ、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 額 イ 口 ウ 肩<sup>かた</sup> エ 目 オ 眉<sup>まゆ</sup>

問七 — ⑤に「過去が塗り固められるから、未来への時間も広がっていかなくなる。」とありますが、克久が「未来へと時間が広がらない」と考える、それを具体的に示した事柄を「く」ということ」に続く形で、本文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

・ ( 十五字 ) ということ。

問八 — ⑥に「克久の耳にそれが聞こえないのは当然だ。」とありますが、どうして克久には「聞こえない」のですか。「くから」に続く形で、本文中の言葉を使って十二字で答えなさい。

・ ( 十二字 ) から。

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点や記号（「」など）も字数として数えます。（設問などの都合上、原文を一部改めたところがあります。）

ヨーロッパ人たちが「より正確に」言葉を使おうと努めてきた——そこから彼らの哲学や科学が形成されたのだが、——のに対して、日本人は、むしろ、あいまいさを好み、表現を和らげようと努めてきたように思われる。「和らげる」とは、すなわち「A」——ことであり、相手の推察にまかせる、ということである。①日本人に論理学や科学的思考が育たなかったのは、おそらくそのせいであろう。

a、こう言えるかもしれない。日本人は、はじめから、言葉とはあいまいなものである、と考え、その厳密な使い方にこだわらなかつた。とも。それどころか、言葉のあいまいな性格を逆手にとって、それを存分に利用してきたものだ、とも。

日本に独特な詩歌の形式、連歌や連句という「座の文芸」が成立したのも、そのためであろう。和歌は贈答の文芸ともいえるし、言葉とは「それとなく」相手にこちらの思いを伝え、相手の推察にまかせる、そのようなものであつた。のちにおける俳諧も、そもそも挨拶の意や、滑稽、すなわちユーモアのやりとり、という遊びの精神から出発し、やがて、詩的会話ともいうべきものに発展していったのである。日本人ほど言葉の洒落に興ずる民族はない、といつてもいいほどだ。

枕詞もそうだし、掛詞から、落語の下げにいたるまで、日本人はいつの世にあつても、言葉遊びに熱中してきた。その性格はいまも変わらない。テレビのコマーシャルなどに、どれほど言葉の駄洒落が流行している。

言葉は、いうまでもなく、コミュニケーションの手段である。そうである以上、一方から他方へ、正確に内容が伝わらなければならぬ。そのためには、あいまいな意味を、少しでも明確にする努力をしなければならぬ。三十年前、私が『あいまいな言葉』という本を書いたのは、そのような目的からであつた。

b、最近、もっとも正確さを必要としているコンピュータの分野で、「フアジー理論」というものがおおいに注目され始めた。この理論は、三十年近く前、アメリカのザデーというシステム工学

の研究者が言い出したもので、②機械にも「あいまいさ（フアジー）」を導入すべきだ、という考え方である。

c、機械は人間が使うものであり、その人間とは、もともとフアジーな性格を持つ存在なのだから、機械はそのような人間に合わせでつくり出されなければならない、というのである。

これは、まさしく従来の意識の変革といつていい。これまで、どちらかといえば、人間が機械に接近すべきである、と考えられていた。だから、「あいまいさ」は機械とのコミュニケーションにおいてはその目的にされてきたのである。けれども、人間が機械を使うために機械的正確さを要求されたとしたなら、人間は機械の奴隷ではない。それはB転倒ではないか。

そうではなくて、機械のほうが人間的な「あいまいさ」を身につけるべきなのだ、というのが、その発想の原点であつた。

d、人間は「ちよつと右」とか、「砂糖を少々」とか「えらく暑いね」といつた表現をよく使うが、こうした「あいまいな」表現は、けっこう日常生活で支障なく機能しているのである。

「ちよつと右」といわれて「その「ちよつと」とは厳密に言つて、何メートルですか」などと反問はする人はいまい。仮に、そう反問されても、「一・三メートルだよ」などと答えられる人もいないだろう。お互いに「ちよつと」で、充分用が足りているのである。

ところが、機械にそう要求しても、機械は相手の意を察して「適当に」ものごとを処理してくれはしない。あくまで正確に、「何グラム」とか、「何度」とか、「何メートル」とか、指定しなければ作動しない。フアジー理論は、そうした融通のきかぬ機械に「あいまいさ」を組み込んで、機械のほうを人間に近づけようとする試みである。

むしろ、機械に③そのような性格を与えることは、e容易ではない。ロボットに「やや左」とか、「ほんの少し前」などと命令して、ロボットが命令者の意をくみ、そのとおりに動くような仕組みをつくるのは、きわめて困難なことだろう。なぜなら、そのためには、ロボットを人間並みの頭脳につくりあげなければならぬからである。そう考えると、人間の持つ「あいまいさ」は、もともと人間的な特質であつて、機械には簡単に真似できない特質、ともいえよう。

正確さというものは、真か偽かを、はっきりさせることである。真

であり、同時に偽である、などということは許されない。つまり、科学的な思考とは、イエスカノーか、コンピューター言語でいうなら、1か0か、二値論理ですべてを割り切ることに成立している。

それに対して、「あいまいさ」とは多義的であるがために、イエスでもあり、ノーでもある、という場合が充分おこりうる。それは二値的な立場からすれば、明らか<sup>II</sup>に矛盾である。しかし、現実はそのような矛盾に満ち満ちているのである。そうした矛盾を巧みにすり抜けていく能力を「(注)融通無碍」とみるなら、あいまいな言葉を平気で使ってきた日本人は、むしろ、<sup>④</sup>現実に器用に順応してきた民族といえまいか。

(森本哲郎「日本語根ほり葉ほり」より)

(注) 融通無碍<sup>II</sup> 考え方や行動にとらわれるところがなく、自由であること。また、そのさま。

問一 

a
---

e
---

 に入る語として最も適切なものを、それぞれ次のア～オの中から選び、記号で答えなさい(同じものは二度使わない)。

ア ところが イ あるいは ウ けつして  
エ なげなら オ たとえば

問二 

A
---

 に入る語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア やわらかい イ ぼかす ウ あいまいな  
エ おだやかな オ 隠す

問三 —— ①「日本人に論理学や科学的思考が育たなかったのは、おそらくそのせいであろう。」とありますが、その理由を、六十字以内で答えなさい。

問四 —— ②「機械にも「あいまいさ(ファジー)」を導入すべきだ」とありますが、その理由として最も適当なものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間とは、もともとファジーな性格を持つ存在なのだから、機械に正確さを求めてきたが、それがかえって使いにくいものになってしまい、結果的に機械を信じるしなくなったり、人間自身が機械に合わせる存在になりつつあるから。

イ 人間とは、もともとファジーな性格を持つ存在なのだから、精密な機械はその使用方法も複雑で「あいまいさ」もって使うことは許されず、高度な知識を得るために、多義的な勉強を必要とするから。

ウ 人間とは、もともとファジーな性格を持つ存在なのだから、イエスカノーしかない、融通がきかなかったこれまでの機械をあらため、より人間らしさに近づけることは、今後の高齢化社会において家族同様の機械の制作は不可欠だから。

エ 人間とは、もともとファジーな性格を持つ存在なのだから、人間がつくりだした機械もそうした使い方におちいってしまいうことがあり、その結果として大きな戦争の悲劇を体験したから。

オ 人間とは、もともとファジーな性格を持つ存在なのだから、その欠点をおぎなうために、機械には絶対的な正確さを求めてきたが、そのことで、日本人の独特の詩的な感性が奪われ、新たな社会と文化の形成が必要となってきたから。

問五 

B
---

 には、「大切なものとそうでないものを取りちがえている」という意味を表す四字熟語のうちの二字が入ります。その二字を漢字で答えなさい。

問六 次の一文は、—— ③「そのような性格を与えること」の内容説明である。(1) (2) に入る語を、1は四字、2は三字で本文中から抜き出して文を完成させなさい。

・融通のきかない機械に(1)の(2)を組み込むこと。

問七 ——④「現実に器用に順応してきた民族」とありますが、筆者はどのような順応の仕方をしてきたと考えていますか。それを表現した部分を三〇字で抜き出して答えなさい。

問八 次のア～オの文について、本文の内容と一致しないものをつ選び、記号で答えなさい。

ア 機械とフアジー理論が結びつくまでは、人間と機械のコミュニケーションはなかった。

イ 日本人は長い間「あいまいさ」を好んできたので、科学的思考に弱い。

ウ フアジー理論では、機械は人間の「あいまいさ」を補うために正確でなければならない。

エ 科学的に割り切ろうとすると、現実には矛盾の多いものになる。オ フアジー理論は、人間の最も人間らしい性質に注目した考え方である。

問九 くくく I「だ」II「に」と同じ品詞ではないものを、それぞれ次のア～オの中から一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

I「だ」

ア それは、大人向けの本だ。

イ A先生の授業は静かだ。

ウ 望むべきは世界の平和だ。

エ 君は勤勉のようだ。

オ 明日は大雪になりそうだ。

II「に」

ア 彼はおだやかに話す。

イ 持久走で軽快に走った。

ウ 必死になって、単語を覚えた。

エ 合格通知を見て、うれしそうに笑った。

オ 友人の受験結果が心配になっていた。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ひちりきは <sup>a</sup>いとかしがましく、<sup>①</sup>秋の虫をいはば、くつは虫な

<sup>うるさく</sup>

どの心地して、うたてけぢかく<sup>②</sup>聞かまほしからず。まして <sup>b</sup>わろ

<sup>嫌なので側近くで</sup>

く吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、まだ御前<sup>おまえ</sup>にはいでで、

<sup>みかど</sup>帝の前には出ないで

ものうしろに横笛をいみじう吹きたてたる、<sup>③</sup>あなおもしろ、と

<sup>ものかげ</sup>物陰で

聞くほどに、<sup>④</sup>なからばかりよりうち添へて吹きのぼりたるこそ、

<sup>途中から</sup>

ただいみじう、うるはし髪持たらん人も、みな立ちあがりぬべき心

地すれ。 <sup>A</sup>やうやう琴・笛に <sup>B</sup>あはせてあゆみいでたる、いみじう

<sup>c</sup>をかし。

問一 —— A・Bの語の読みを現代仮名遣いのひらがなで書きなさい。

問二 —— a・b・cの文中での意味として最も適切なものを、それぞれ次のア・イの中から選び、記号で答えなさい。

a 「いと」

ア 妙に イ 大きく ウ たいそう エ 少しも

b 「わろく」

ア わるい イ よくない ウ よい エ わるくない

c 「をかし」

ア 越 深い イ おかしい ウ むなししい エ うつくしい

問三 —— ①・②の現代語訳として最も適切なものを、それぞれ次のア・イの中から一つ選び、記号で答えなさい。

① 「秋の虫といはば」

ア 秋の虫は不快なので イ 秋の虫に例えると

ウ 秋の虫と同じなのは エ 秋の虫で 趣があるのは

オ 秋の虫を捕まると

② 「聞かまほしからず」

ア 聞く人はいない イ 聞くのがよい

ウ 聞くこともしない エ 聞く気はしない

オ 聞かないのがよい

問四 —— ③「あな、おもしろ」の主語として最も適切なものを、

次のア・イの中から選び、記号で答えなさい。

ア 帝 イ 作者 ウ ひちりきを吹く人

エ うるわし髪持たらん人 オ 横笛を吹く人

問五 —— ④「なからばかりよりうち添えて吹きのぼりたる」で吹

かれているものを、本文中の言葉で答えなさい。

問六 本文中には言葉の意味を強める「係り結び」がみられます。

その係りの語を抜き出して答えなさい。また、その語の結びの語の活用形も答えなさい。

問七 本文『枕草子』について、次の問いに答えなさい。

I 『枕草子』の内容を説明したものととして最も適当なものを、次のア・イの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仏教に関係した説話や、当時、民間に伝わっていた説話が 広く収められている。

イ 平家一門の興亡の姿や戦乱に明け暮れた時代のありさま が生き生きと描かれている。

ウ 特に世の無常を見つめ、人生や自然についての自由な批評、 感想が述べられている。



エ ある中宮ちゆうぐうに使えた女官にようの宮廷生活きやうていでの体験や身の回りの自然などへの思いが、鋭い感性で述べられている。  
オ 従来の漢文体の日記に対し、仮名文かみぶんの日記文学を創造し、写実性のある人間像が描かれている。

II 『枕草子』と同じ時代に書かれた作品を、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 『土佐日記』 イ 『奥の細道』 ウ 『徒然草』 エ 『方丈記』

III 『枕草子』の作者名を漢字四字で答えなさい。